

Title	ブルック・ファーム
Author(s)	穂積, 文雄
Citation	経済論叢 (1960), 86(4): 227-241
Issue Date	1960-10
URL	http://dx.doi.org/10.14989/132787
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

經濟論叢

第八十六卷 第四號

ブルック・ファーム……………穂 積 文 雄 1

社会主義国における国際価値論……………鈴 木 重 靖 16

対外関係よりみた元明兩朝の比較……………伊 藤 幸 一 33

シュンペーターの景気変動理論……………永 友 育 雄 43

昭和三十五年十月

京都大學經濟學會

ブルック・ファーム

穂 積 文 雄

三

われわれはブルック・ファームの構想を、まず、その主唱者リプレイにもとめた。そして、それを、かれがエマースンによせた手紙の一つにおいて得た。われわれは、それにおいて、ブルック・ファームの基本的構想を、よくうかがうことができる。そのことにうたがいはない。しかしながら、およそ、手紙というものは、もと、ある特定のひととひとの間における意思疎通の手段である。それが普通である。しかるに、ある特定のひととひとの間における意思疎通はその手紙にのみよるとはかぎらぬ。そのほかに、かれらの意思を疎通するものがあることをさまたげない。いな、それがあることが、むしろ、多くの場合である。そうかんがえてよからう。それは会談のこともあろう。別の手紙のこともあろう。伝言のこともあろう。あるいは、また、ひとびとのあつまりにおける談論のこともあろう。そのいづれであつてもよい。それは、とうところでない。いづれにしても、その場合、その手紙は、それを書くひとが、そのことを意識するといなにかかわらず、そのことを前提とし、その前提の下に書かれる。それは、いなみがたいところとせねばならないであらう。そうすると、その手紙は、そのような意思疎通過程におけ

る一部にすぎぬということにならねばならない。したがって、その理解は、そのような過程の理解を要求する。そういわねばならないことになる。ということは、その手紙の理解は、ただその手紙だけでは充分とはいえないということを意味する。その理解を欠く当事者以外の一般人は、それを読んでも、ひとはなしの一部をきくようなものである、といえよう。そして、そのことは、いま、われわれが問題とするリブレイの手紙についても、いえないわけではない。げんに、その冒頭に「カンカルドでのわれわれの会談で、わたくしが設立したいとおもっているアッソシエーションの理念をあなたが完全に理解されたようには、どうも、かんがえられませんか¹⁾。」といっている。そのエマースンは、一八四〇年二月二日、カンカルドよりその兄弟のウイリアム・エマースン (William Emerson) に、ブルック・ファームのことについて、手紙を書いているが、かれは、その中で、リブレイの購入せんとしている土地はロックスベリー・スプリングストリート (Spring, St. Roxbury) の「^{スプリング}」一、二〇〇エーカー、代価一二、〇〇〇ドルであるとか、小屋の建築が一二、〇〇〇ドルとか、リブレイが開拓者たちとともに翌年四月一日にそこに引きうつるつもりでいるとか、いうことをつたえている。そして、それらのことは、右のリブレイの手紙にはみられぬところである。

そればかりではない。リブレイの構想は、あくまで、リブレイの構想である。そのことは、それが主唱者の構想であることを意味する。そして、一方からみれば、そのことは、それを、もつとも信頼するに足るものとするであろう。それはひとめなければならぬ。だが、他方からみれば、そのことは、それを主観的なものとする傾向がないとはいえない。そして、そのような場合、そこに、希望的観測がしのびこむ余地がないとは、断言のかぎりではない。そうでなくてさえ、ことこころざしとたがうは、世の常のことである。いはんや、希望的観測の存する場合

において、その公算はさらに大なるものがあつても、ふしぎではない、といわなければならないであらう。かくて、とくに、このような場合、いわゆる試行錯誤がまぬがれたいところとなるわけであらう。そうなると、構想は一つのことである。構想の実現は他のことである。そして、構想がそのまま実現しない場合には、それは変容する。すると、最初の構想はかならずしも構想とはいえないことになる。その場合、それは、真の構想の生成過程の一段階にすぎない。真の構想の一資料にすぎない。そういうことにならう。ところで、ブルック・ノームにおいても、試行錯誤をまぬがれなかった。というよりも、試行錯誤の連続であつた。そういつても、はなはだしいいすぎではなからう。それは後の推移がしめすところである。

こうみてくると、ブルック・ファームの構想をあきらかにするためには、右のリブレイの手紙だけで満足するわけには、ゆかぬことになる。一般人を対象としてかたられたものが必要となる。第三者のとらえた、客観的なものも重要となる。そこで、われわれは、すすんで、そのようなものをもとめなければならぬ。そして、われわれは、それをもとめて、すくなくとも、二つのものを得る。わたくしはつぎにそれらをかかげるであらう。

その一つは、一八四一年五月の「マンスリー・ミセラニー・オブ・リリジョン・アンド・レターズ」(*The Monthly Miscellany of Religion and Letters*)に掲載された「ジョージ・リブレイ師」(Rev. George Ripley)と題する一文の中にみいだされるものである。それはつぎのごとくである。

かれの将来のプランは、わかい男女の教育に關聯をもつ。かれの直接の目的は、われわれの理解するところによれば、實際教育を目的とする一つの協同組合のあつまり(a gathering of cooperation of association)である。われわれは、空想的なもの、または、トランセンデンタルなものは、なにもみいだすことはできない。それどころか、それは、われわれには、實際的であり、

かゝる実行できる (both practical and practicable) ともわれる。それは、わかいひとたちには、身心の発達^{development}の諸利点を結合し、としのいったひとたちには、精神的教養と健康上・経済上の習性の諸利点を結合しようとする。そして、それを、その目的に、とくに、好適とかんがえられるような社会諸関係の下において、おこなおうという。各人の資産の一部を結合することによって、多数の個人が、個別的に得る以上の改善と享樂の便宜を得るであらう。しかも、個人の趣味や家族的結合の尊重に考慮がはらわれる。哲學的見解や神學的見解をことにするひとびとが、このくわだてにおいて結合することは、派閥の存在をゆるさぬものであり、党派的だという汚名を受ける余地を、けつして、のこさない。

かく、ブルック・ファームについて弁じたる後、同論文はさらに、『「ニュー・イングリランド・ファーマー (New England Farmer)」の論文からの一、二句は、このインスチチューションの性質を、いつそう、あきらかに、しめすであらう」といって、つぎのごとく引用する。

この市 (ボストン—訳者註)、および、その近郊の教名の紳士たちによつて、一の「農業・教育の實際的制度」 (Practical Institute of Agriculture and Education) が形成せられた。このインスチチューションの企画は、神学・法学・医学などの専門的職業 (learned profession) の道をすすもうとしないひとびとに、自由な教育の道をひらくにある。生活の實技 (the practical arts of life) の根底によこたわる科学の諸原理を主とし、語學の研究を従とする。その目的とするところは、科学的農業の研究とその實際的作業を結合すること、現代農業におけるあらゆる偉大な改善を實驗によつて例証すること、職業の神聖と農業に必要な知識・能力をしめして、農夫の土地の耕作への愛着を増大し、よつて、農業を一生のしごととしようところをすわかいひとびとに、かれらの職務を理知的に遂行する準備をしてやること (prepare for the intelligent discharge of the duties of their calling) にある。このインスチチューションには、古典學習の部門も附設され、そつては、学生は「ニュー・

イングラントの諸大学への入学準備教育を受け、または、アンダー・グラデュエーツと同様のコースを履修し、同時に、また、農業の基礎をなす諸学科を研究し、すぎなだけ、その實際をきわめる機会にめぐまれる、ともきいている。

いま一つは、一八四二年一月、エリザベス・パーマー・ピーボディ(Elizabeth Palmer Peabody)が、トランセンドENTALISTの機関誌「ダイヤル」(*The Dial*)に寄せた、「ウエスト・ロックスベリー共同体の計画」("Plan of the West Roxbury Community")という、一文の中にみいだされるものである。ピーボディ女史(一八〇四—九四)は有名な女流トランセンドENTALISTで、教育家・闊秀作家として令名あり、また、書店・出版業の経営でも知られていた。多くの思想家を知友にもち、リブレイ夫妻とも、もとより、親交があつた。それに、かの女の末妹ソフィヤ(Sophia Peabody)はナサニエル・ホーソン(Nathaniel Hawthorne)の夫人となつたひとである。そんなわけで、かの女はブルック・ファームへも出入している。ブルック・ファームについては充分以上の理解があるといつてよい。しかも、かの女は、この文中において、一箇の局外者として、これをしたためるといつている。もつとも、そうはいつても、かの女が、ブルック・ファームの企画に普通以上のふかい厚意をよせていることはおおいなところである。しかし、それにしても、これは、ブルック・ファームの計画を一般人に紹介する目的の下に執筆されたものであり、詳細をきわめたものである。その上、それは、同時代人の手になるものである。それだけに、それは、まことに貴重な資料たるを失はぬ、といつてよいとおもう。だから、長きをいとわず、引用するとにする。

ダイヤルの前号に、キリストの社会理念略見("A Glimpse of Christ's Idea of Society")とよう、おそらく野心的ともおもわれる標題の下に、若干の記事がのせられたが、それへの附記に、本号に、まだなまえもなく、また、はつきりと存在しても

いないが、われわれのなかの、ひとつの小さな団体によって、この偉大な理想をある程度実現しようとするところについて、一文をのせることが、つけられた。そのころのみは、ごく小規模におこなわれた。おたがいに行ふことなく、生活事情もことなり、反撥の動機である社会悪もおなじでないが、おなじ目的——男性および女性として、かれらの自然性に完全に忠実であらうとすること——を志向する小教のひとびとが、おたがいにしりあい、「爾芽大学の教授団」(the Faculty of the Embryo University)にならうと決意した。

かれらはかんがえる。宗教的・道徳的生活をその名にそむかぬように生活するためには、ある程度世間からぬけ出て、共產体を結成し、競争と世の常の商業の慣例を排斥するとともに、独立と孤立を、意のままに、確保するため、充分の財産、または、財産を獲得するための手段、を保留することが必要である、と。かれらは一つの農場を購入した。それは農業をかれらの生活の基盤とするためである。ただし、農業は自然に対する関係において、もつとも直接・単純であるからである。

コンミニチーのプランは、一の経済としては、つぎのごとく約言される。財産のあるものは、みな、株式を取得し、その一定の配当を受領する。つぎに、住居と食事を共同にする。食料は卸売りにより購入するか、または、農場で生産する。そのいずれをとるかは、各人の希望による。みなはコンミニチーのために労働し、一時間につき、一定の率の報酬をうけとる。しごとをする時間、しごとの種類は、各自が選定する。この労働の結果と配当でもって、かれらは生計費を支払い、また、その他一切の必要なものを、原価で、コンミニチーの倉庫において買うことになっている。そのために、コンミニチーは倉庫をみたしておかねばならない。この経済をまったくするために、かれらは、おいおいに、下は生活の健康・娯楽につくす機械的なしごとから、上は精神の糧や衣を供して生活をかざるもつとも精巧な芸術におよぶ、あらゆるしごと(craft trades and all modes of business)を、じぶんたちの間で、いとまねばならない。

労働は肉体的たると知的たるとをわす、すべて同一賃率で支払われるものとする。それは、つぎの原理にもとづく。労働が、ただ、肉体的だけとなれば、それに時間をさくことは、個々の労働者にとって、より大きな犠牲となる。なんとなれば、無知であればあるほど、それだけ、教養(cultivation for intellect)のための時間がほしいからである。さらに、知的労働は、それ自身の中に、より高い快楽をふくみ、それ自身の報酬が肉体的労働よりも大である。

あらゆる種類の労働におなじ貨幣価値を設定するいま一つの理由は、労働は共同の利益のためにおこなわれるときは、すべて、神聖である、という偉大な真理を公表するためである。聖人と哲人は、すでに、これをする。しかしながら、小人の世界はしらない。そこで、周囲の世界の道徳的影響の圏外にいない、コミュニチーのわかいものために、労働を平等化する決定的な方法をとらねばならないのである。コミュニチーの成員はみな社会的に平等であり、コミュニチーは、その内部において、社会的平等に反することがおこなわれないことをのぞむ(Community will have nothing to be done within its precincts, but what is done by its members, who stand all in social equality)。それは、「子供たちが、サーヴィスの中に、愛情と好意から得られるもの、と、それをなすひとの義務から得られるもの、とを差別することを知る」(to learn to expect one kind of service from Love and Good-will, and another from the obligation of others to render it) ことなからしめんがためである。——それは普通の社会における悲哀であって、共同社会の母親のひとりによって、すなおなたましい、をきすつけるもの(destructive of the soul's simplicity)といわれたものである。

したがって、一般教育(Universal Education)は、人世の娯楽ならびに優雅に必要ならゆる作業をふくむものであらうから、組合員は、いずれも、たとい、かれがみぞほり人であらうとも、それにおいて、わかいメンバーの教師となるであらう。また、この肉体的労働の昂揚がコミュニチー内における礼法や洗練の調子を低下させることにはならないであらう。「ひかりの子」(The "children of light")には、かれらなみの分別が、まったくないとはなり(care not altogether unwise in

their generation)。かれらには、ひとつの、目にみえぬ、万能の、本然という護衛者 (guard of principle) がある。洗練にたえぬひとびと (minds incapable of refinement) は、このアッソシエーションに魅力を感じてはいつてくることはないであろう。それは、ひとつの、コミュニティーである。理想の上から傾倒するひとびと (the ideally inclined) にとってのみ、それは魅力があるであろう。しかしながら、そのようなひとびとは、人世のあらゆる階層の中に、ひとの目につかぬいたるところに、存在するであろう。(these are to be found in every rank of life, under every shadow of circumstances)。み、そのなかのみぞ、ほり人の中にすら、宗教の感化によって、高いところから、おだやかに (in mere superiority)、みかけだけ洗練されたひとびとや、論語読みの論語知らず (the book-learned) を、みくだすことのできるものが、いるはずである。

さらに、このコミュニティーに入れば、たれも、ただ肉休労働のみに終始しはしない。アッソシエーションのための労働の間は、一般のとりきめで、限度がきめられており、その上、各個人の意思によって、短縮することもできる。そして、洗練・向上のため、教養・社交の道が、すべてのひとに、ひらかれている。コミュニティーからかえされた時間は、また、致富のために、つかってはならないで、精神財の作出につかうことになっている。このコミュニティーは、富裕を目的とするが、その富裕は、富を表現する貨幣ではなくて、貨幣の表現する富それ自身、すなわち、「精神生活をいとむための間暇である。」コミュニティーは一つのコミュニティーとして、農業労働の生産物について、一般外界ととりひきをする。そして、家庭に収容することができるかぎり、多くのわかいひとびとに教育を売り、その子供たちとの共同生活に入る。コミュニティーは、最後には、あらゆる必要品だけでなく、あらゆる肉体、および、精神の健康にとつてのぞましいもの、すなわち、書物・機具・標本 (collections for science)・美術品・楽器械類 (means of beautiful amusement) を供給することができるようになりたいと希望している。これらのものは、すべてのひとの共有物である。かくて、私有的念をかきたてずにはおかぬものは、もはや、欲望の対象とはならないことになる。そして、さもないところ (sordid passion) は、あらわれることに、その露骨な我欲を露呈することになる。

う。コンミュニチーがその窮極の成功をおさめたあかつきには、コンミュニチーは我欲のもとむるすべての目的を實現して、しかも、精神的な祝福に浴する。そして、それは偉大な精神のみが熱望することゝゆるされるところのものである。

そして、各個人に要請されている資格は、このことを永世不易の条理とするであらう。善心は、つねに、このひとびとに、なくてはならないもの、といつてよい。各人はコンミュニチーのために適度の労働をしなければならぬ。そうしなければ、コンミュニチーの恩恵にあずかつてはならない。だから、メンバーをきめるのは、この機^{メカニズム}構^{ストラクチャー}の原理であつて、その将来のみこみではない。この原理は、競争や採算ではなくて、世事における協同であり、男女各人の中に完全な人道精神が存するという信念の各人による自己展開である。前者は人間愛の人世への行使であり、後者は神の愛の人世への行使である。現在の社会で満足しており、その正義感覚がその社会の一般の行爲・諸制度・商業精神によつてきつづけられないようなひととは、みな、このコンミュニチーとは、なんらかかわりあひはない。じぶんが肉体労働からまぬがれるために、このんで他のひとびと（そのひとびとは救済のためにかれ以上に、ときを必要とする）の最上のと、きとち、からを肉体労働に投ぜしめるひと、また、みな、このコンミュニチーは、なんら、かかわりが無い。社会が、いかに、その愛護・教化に従事する成員に負うかを、社会を構成する各個人の必要によつて測定しないひととは、みな、このあたらしい社会に用がない。なんらかの対価をあたえないで、なから得ることゝをこのむものは、みな、永遠に、このコンミュニチーのそとにとどまるであらう。

しかしながら、コンミュニチーの原理に一身をささげるひととは、みな、そのくびき、がやすく、その荷はかるいことをしるであらう。キリストがかれの王国^{キングダム}についてかたつたことは、すべて、このコンミュニチーについても、ある程度、いうことができる。そして、それゆゑ、それは、ある程度、キリストの理念を具現すると信ぜられる。なんとすれば、そのはいる門はせまい（マタイ伝七章一四一訳者註）。それは文字どおり「煙^{スモーク}にかくれたる」（マタイ伝一三章四四一訳者註）真珠（a pearl hidden in a field）である。そのために、よろこんで、そのいのちをうしなうもののみが、それをみつけるであらう。そのこゑは、わか

のを、かなしみつつ去らしめたこゝえである。「往きて汝の所有を売りて貧しきものに施せ、（さらば財宝を天に得ん―訳者補足。）かつ、きたりて、われに、従へ」（マタイ伝一九章二二、ルカ伝一八章二三―訳者註）。「まづ神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし。」（マタイ伝六章三三―訳者註）。

労働に關するこの原理は、道德、宗教生活の根柢によこたわっている。けれど、「かねは万惡の根源」というよりも、「労働は万善の萌芽」という方が、より眞実であるからである。

すべてのしごととは季節ごとに提議され、コミュニチーのメンバーの自由選択にまかされることになっている。そして、たれも選択しないし、ごとには、ひとがやとわれる。だが、コミュニチーの内にあって、げんに、できるしごとを、ほおっておいて、そのためにひとをやとうことは、かんがえられていない。雇川労働をさけることが非常にのぞましい。それで、すべてのしごととは自發的な犠牲によつてでも、日におこなわれるものと、信ぜられている。

はじめにあつて、なんらかの例外があるとすれば、それは、でかきたいと熱望するひとを、みんな受け入れるのに資財が足らないからである。かれらは、避難所がなければ、でかけることができない。そして、この天候では、家を建てぬかぎり、避難所をもつことはできない。そして、かねがなければ、家を建てることはできない。ここは、土地や森に所有者のない、ロビンソン・クルソーの島でもなければ、また、西部の平原や岩山でもない。マサチューセツンの中では、野蠻なインディアン、またはフロリダの合衆国軍隊がするように、徒手空拳で、土地から生活資料をつくり出すに、足るだけのひろさはない。

この、すべてのひとに、その行動部門を選択させる案は、たちまち、指導の天才（Genius of Instruction）を主座につかすことになる。父（フイー・トレンネル）は精神生活の生命である。知識は天然の衝動によつて無知の上にふりそそぐ。あらゆる学芸は応答を切望する。「知はさけぶ」（“Wisdom Cries”）。もし男女おのおのが、みな、その愛するところのものを、自然的につたえることができるだけの時間をかけて、教えるとなれば、教育は善役でなくなる。そして、われわれは、さらにいってよい。

まなぶことは、もはや、ほねおりしこと (bare) ではない、と。このアソシエーションの多くのメンバーのなだる案

養は、まったく、すぐれた、文学的利点をそなえた学校として、公衆のところに、このアソシエーションに対する関心を、すでに、喚起している。会員の多くは、教育については、多年の実地経験を有し、精通しており、その方法および法則を、教科の性質と教を受ける生徒の条件の中に、みいだそうとしているのに、慣行と無定見より採用せねばならないのを、なげいてきたものである。各教師はその研究乃至日課の復誦の時間を指定する。学者、あるいは、子供の親たち、または、教育委員は、当分の間、教科を選定する。生徒は、教師について教科を履習する間は、教師の節度に服する。

農業は外的生活 (external life) の基礎である。それゆえ、実際とむすびついた科学的農業が、はじめから、指導の主要な部分となる。これは、あきらかに、自然諸科学・数学、および、会計学をふくむ。しかしながら、古典の学習も、また、公平にあつかわれている。少年たちは、そこでは、われわれの大学に入る準備をうけることができる (be fitted our colleges there)。そして、大学の課程をふねことすらできる。おのおのの生徒の特殊研究は、老若男女をとわず、かれらの知能に応じて (according to their inward needs)、厳密に規制されることになっている。こどもたちは、成年に達したのちも、もし、のぞむなら、組合員としてコミュニティーにとどまることができる。だから、こんにち、よくみかけるように、生活費をかせぐことに没頭するということは、ないであろう。それでも、かれらは未成年の間に三・四ドルをかせぐ機会をもつてであろう。だから、かれらは、二〇才になると、もし、かれらがのぞむならば、コミュニティーを去って、そのもとで、とひろい教育とをもって、世界の最良の社会のどこにおいても、充分に生活費を得るであろう。計画にこの特質があればこそ、両親たちは、このコミュニティーに加入し、かれらのこどもたちのための大きな個人的蓄積ののぞみ——かねつくりのために生きるという、よのつねのねがい——を、すべて断念することに、なんらの顧慮をはらわないですむのである。かれらのこどもたちは、一九才まで、食費をとらず、教育も無料、両親の疾病・死亡の場合は面倒をみてもらうであろう。そして、両親の方も、七〇才をすぎれば、じぶんのためたかねで

くらしでゆけぬときは、コンミュニチーによって、扶助せられるであらう。

かねをもたないでコンミュニチーにはいったものもある。これらのひとびとは、他のいづこにおけるよりも、よりすくない労働で、より充分に、より安楽に、じぶん自身とその家族を扶養することができるであらう。一方、コンミュニチーにとっては、その労働は有益であらう。そう信ぜられる。コンミュニチーは、いかなる意味においても、慈善施設ではない。しかしながら、窮極においては、精神的な資格のあるひとは、みな、うけいれることができることを期待している。

このささやかなオーガニゼーションが、外部の世界から、なんらかのいぢわるい目でみられることがある、ということは、さけられないようにみえる。キリストの王国(キリスト)の諸原理を現世に建設することができる、ということを感じないものは、それを冷笑するであらう。しかしながら、かれらといえども、ともかく、それが無害であるということとは、これをみとめざるを得ない。もし、それが、その建設者の希望を実現すれば、それは、ただちに、いくえもの祝福となるであらう。その道徳的な、よかけ(moral sense)は健康によいはず。それが存続するかぎり、それは、うつくしい兄弟愛のひとつの例であるであらう。もし、その労働が成功して、精神と習俗(mind and manners)の改善、との結合に成功すれば、それは農業に従事するひとびとに、とうとい教訓をたれ、こんにち、野心と、なにか、よりよいもの、さらには、向学心、によって、かきたてられている、いなかより都会への殺到(シラ)の阻止に、なんらかのはたらきをするであらう。多くの青年が農民生活をする。その理由は、そうすることによつてのみ、知識人を友人にもったり、知識を得る機会をもったりすることができる、ということである。それでも、かれらは、つぎのことをしるのみである。すなわち、もし、農民生活に知識と節度があり、その労働が、それがまさにあるべきことと、研究と結合されるならば、精神の完成にとっては、職業生活(プロフェッショナルライフ)の方が、普通、農民生活よりも、不利である、ということ。このコンミュニチーは、わかい農業家にとっては、ひとつの学校であるであらう。かれらは、ここで、実技だけでなく、かれらのしごと(work)の学理をも習得し、その後、たえず、かれらのしごと(work)を改善することができ。それは、また、最良の師範学校(normal school)

school) となるであろう。そして、それは、師範学校としては、われわれの公立小学校制度 (common school system) において、その素質のわるい教師たちの非能率をなげくひとびとの関心を、要求してもよい。

また、つぎのことも、しっておかねばならない。それは、コミュニチーの各人がおこなうしごとをおわっても、かれらは、なお、余暇をもつ、そして、その余暇において、周囲の世界と交渉をもつことができる、ということである。まったく授業をしないひともある。これらのひとびとは、もし、したければ、とくに、書物を執筆し、芸術に精進して、報酬を得てもよい。また、ひととしての、いろいろのいとなみを、してもよい。こんにち僧侶のちからをおとしているわすらいやいとわしき (the odium or the burden) というもののないキリストの福音の説教者が、このコミュニチーから出てくることもある。そして、もし、このコミュニチーから牧師が出て、報酬のために、こんにちのようなコングリゲーションのなかまにはいることがあるとしても、その場合でも、いつでもかえるところがあるということは、こんにち腐敗した関係の原因であるコングリゲーションへの実質上の依存から、かれらをすくうものである。われわれの周囲のおとろえつつある教会のなかにも、牧師と民衆の、さらには、教えるものと教えられるものとの、むかしながらの、ほんとうの関係の、うつくしい事例がある。それはうたがないところである。しかしながら、慈悲がそれを消してしまうことを禁ずるがゆえに、たくさんのローソクが、いまなお、燭台——それは、もはや、金製や銀製ではない——で、かすかなひかりをはなっている、という、うとましい事実を、かくそうとくわだてても、それは、むだである。しかしながら、霊^{スピリット}をして、ふたたび「好むところに」^{good to}ふかしめよ (ヨハネ伝三章八—訳者註)。給与や他の物^{フィニッシュ}品によつてしぼられしむることなかれ——しからば説かれたことば (the preached word) は、それみずからのころもであるいかめしい威厳を、回復するであろう。そして、それは、たといみつきとり (publicans) やつみびと (sinners) と同席するとも、ふたたび、「学者らのごとくならず權威あるもののごとく」 (マタイ伝七章二九—訳者註) とくであろう。

以上、われわれはブルック・ファームの構想をたづねて、それをつたえる資料を渉獵した。いま、それらを考察

して、その基本的特質を追求するとき、それはつぎのごとく要約されるであろう。

それは、まづ、(一)知識と労働の結合をめざす。つぎに、それを実現するために、(二)教育と、(三)産業、とくに、農業の経営をおこなう。そして、そこでは、(四)共同労働をおこない、(五)自由競争が否定され、(六)自給自足を原則とし、(七)共同生活をいとなみ、(八)共同食事をする。しかも、(九)各人の自由を尊重し、したがって、(十)私有財産を肯定する。そして、そのはなはだしいことには、それは、財政面において、(十一)株式組織を採用し、(十二)利益が労・資双方に分配される。

そして、こうみえてみると、われわれは、それが、フーリエー (François Charles Marie Fourier 1772-1837) のフフランジュ (Phalange) の構想に近似するところ大なるものがあるのをみとめざるを得ないであろう。げんに、ホーソンは、その「ブライスデール・ロマンス (The Blithedale Romance)」のなかで、カバーデール (Coverdale) をして、つぎのごとく述懐させている。

協労 (labour of brotherhood) はフーリエーの予言の若干を、すでに、実現した。わたくしは、ほとんど、そうおもった。⁵⁾

そして、このことは、当時、フーリエーのフフランジュの思想がアメリカにひろがっていたことをおもうとき、リブレイの構想が、その影響を受けていたという推定をなしたしめるに足るといってもよからう。また、このことは、後にみる、ブルック・ファームのフフランジュ化が、当然のことであるとはいはないまでも、あやしむにはあたらないところといつてよいであろうことを、示唆するものとなすに足りようか。

- (1) 拙稿ブルック・ファーム、二、註、(3) 経済論叢・第八六巻・第二号、(昭和三五・八)
- (2) *The Letters of Ralph Waldo Emerson*, edited by Ralph L. Rusk (New York: Columbia, 1939), II, 365.

- ③ "Rev. George Ripley", *The Monthly Miscellany of Religion and Letters*, May 1841, pp. 293-294 (to be found in *Autobiography of Brook Farm*, edited by Henry W. Sams, University of Chicago, Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice-Hall, Inc., 1958, pp. 16-17).
- ④ "Plan of the West Roxbury Community", *The Dial*, II, January, 1842, 361-368. (to be found in the above mentioned *Autobiography of Brook Farm*, pp. 62-68.)
- ⑤ Nathaniel Hawthorne, *The Blithedale Romance*, The Norton Library, W. W. Norton & Company, Inc., New York, 1958, p. 84. (米沢)